

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第5章「命」

福島第一原発事故から1年がたつた2012年3月11日。3、4号機の補機操作員林崎悟は、いわき市郊外にある寺で親友の墓に手を合わせていた。

親友の名前は小久保和彦一。

同じ3、4号機補機操作員だった小久保は、4号機タービン建屋の地下で津波に襲われ命を落とした。

その場に林崎もいた。

1年前のあの日、地震の揺れが収まると中央制御室近くの中操外執務

室にいた補機操作員の3人が2

人1組でタービン建屋内の調査に出た。林崎は後輩とともに建屋2階に

小久保ら2人は地下1階に向かった。残の2人は1階にいた。

津波にのまれた親友

14



林崎と小久保はともに当時24歳。いづれかの家でゲームをしていたが、仕事が終わると飲みに行った同僚だった。

小久保は高専卒で2年遅い入社だった。いつも一緒だった。執務室の席も隣

になっていた。林崎が

2階の一部が吹き抜け

2階で設備の点検をし

ていると、1階をのぞ

き込んでいた後輩が叫

んだ。

呼び掛けに声なく

へなってる。

余震か？

そう思った瞬間、何かが爆発したとばかりに聞こえた。林崎は片時も

まなまなとした。シャッターが紙の

ようにめくれて、真っ黒な水の塊が

小久保ら2人の遺体は事故から19

日後、タービン建屋地下で見つかった。林崎は捜索隊に志願したが、上

司は林崎が受けるショックの大きさを

考えて認めなかった。

遺体に対面していない林崎には小

久保が死んだという実感が無い。

事故から1年、真新しい黒い御影石の墓標には、小久保の戒名と名前

だけが刻まれていた。

「おまえの分まで人生を大切に生きるから」

林崎はそう墓に話し掛けた。だが

不思議と涙は出なかった。中操外執

務室に行けば、そこに小久保が戻

ってきている、そんな気がしてならな

かった。(敬称略。肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)

事故から3年の2014年3月、東京電力福島第一原発の正門近くに建てられた慰霊碑